

## 序 論)

今日の聖書箇所が登場するヘロデの先祖は、イスラエルの族長ヤコブの兄エサウの子孫で、イスラエルの南方に住む「エドム人」と呼ばれる人々でした。

ヘロデ大王は、紀元前 70 年頃に生まれ、ユダヤの大祭司ヒカノスの孫娘マリムネと結婚しました。自分がユダヤ人である血統の正当性を確立しようとした。

ヘロデは、当時エジプトの女王クレオパトラのもとにいたアントニウスの援助を受けてエルサレムを手に入れることに成功しました。ヘロデはその後ローマ政府に様々なかたちで忠誠をあらわします。ローマ元老院からの高い評価を受けて、ヘロデはついに「ユダヤ人の王」の称号を授けられました。

紀元前 31 年にアントニウスがオクタヴィアヌスに敗北すると、直ちにオクタヴィアヌス側について彼に忠誠をあらわしました。このように自分の野心のために、ありとあらゆる努力を重ね、ついに「ユダヤ人の王」にまで上り詰めたヘロデ大王は、彼の一族にとって誇りであり、偉大な英雄という存在でした。

## 本 論)

ヘロデ大王の死後、遺言に従って腹違いの三人の息子、ヘロデ・アケラオ、ヘロデ・ピリポ、ヘロデ・アンテパスのそれぞれが領土を分割して受け継ぎました。やがて長男アケラオは王位から失脚します。次男ピリポは病弱で平凡な性格でした。三男アンテパスはかつて父ヘロデ大王のようにユダヤ全土を支配下に治めるような王権の復興を願っていました。

ヘロデ大王の孫娘であるヘロデヤもまた祖父ヘロデ大王のような偉大な王権の復興を願う女性でした。大王の腹違いの孫であるピリポと結婚して娘サロメをもうけますが、病弱で平凡なピリポとの結婚生活に満足できませんでした。やがて夫の腹違い弟である野心家のアンテパスに惹かれるようになり、ついに二人は結婚することになります。ところがこの結婚はモーセの律法が禁じている姦淫に値するものでしたので、バプテスマのヨハネは公衆の面前でそのことを厳しく非難しました。このようなヨハネの発言はヘロデヤの誇りと自尊心を激しく傷つけました。彼女にとってこのままでは我慢できないことでした。

さて、今日の中心人物となるヘロデ・アンテパスは、二心をもった典型的な人物です。ヘロデヤとの不道徳な関係が続けたいという情熱と、バプテスマのヨハネの神に対する純潔さのどちらをも慕っていました。ヨハネを殺そうする妻ヘロデヤの手から彼の身の安全を守るために、彼を捕えて幽閉するという妥協案を考えつきました。彼は自分の計画が上手くいったと思っていましたが、ヘロデヤとヘロデヤの娘サロメのことによって思わぬ結果になりました。こうしてヘロデはヨハネを殺すよう部下に命じました。

## 適用)

野心家として強気に振る舞っていても、二心のアンテパスは最後まで自分の良心を貫くことができませんでした。結局のところ彼には三度のチャンスがありながら、その一つも活かすことができなかったのです。それが彼に対する神のあわれみの時だったのかもしれませんが。

- 1 当惑しながらもヨハネを尊敬し彼のことは聞くことを喜びとしていた時：でも「受け入れなかった。」
- 2 部下たちの前でヘロデヤの娘サロメからヨハネの首を求められた時：でも「拒否しなかった。」
- 3 イエスキリストのことを聞いて被害妄想に駆られた時：でも「赦しを求めなかった。」

### <聖書のことば>

「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。

ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

そういう人は、主から何かをいただけたらと思っただけではありません。

そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。」(ヤコブ 1 : 6 ~ 8)

## 決断と応答)

私たちが「そのうちに」「そのうちに」という言い逃れを言い続けることの空しさに気づきましょう。

先のことばかり気遣って自分が不正なことには妥協していることが示されたなら。

自分のしていることが神のみことばに忠実でないことを心に示されたなら。

いま神の前に自分の過ちや悔い改めるべき罪に気づかされたなら。

今日、みことばに従って、直ちにイエス・キリストに助けを求めましょう。

二心で誤魔化すことをやめて、言い訳ばかりして言い逃れるのではなく、直ちにキリストの御前を呼んで助けを求めましょう。

天の父は「苦しい時、困った時は、いつでも帰って来ていいんだよ。」と招いておられます。

イエス・キリストの救いを受け、汚れと傷をいやされて、新しい人につくり変えられて、あなたの帰りを待っておられる天の父のもとに立ち返って行きましょう。神のあわれみの時を無駄にしないようにしましょう。